

愛知大学人文社会学研究所・所長 伊東 利勝

お忙しいところ、お集まりいただきまして、ありがとうございます。本日の会は、愛知大学人文社会学研究所の主催ということでありますけれども、「社会と基盤」研究会に共催をいただき、実現したものです。

この人文社会学研究所は、発足したばかりの非常に新しい研究所でございます。ただ、全く新しくできたというわけではありません。これには前身があります。本学には、現在、文学部をはじめ、経済学部、法学部など7学部1短大が設置されており、以前は教養部もございましたが、形式的にこういう組織に所属しつつ、人文系の研究に従事している教員が、組織横断的に、文学会という学術団体を作っておりました。これが開学当初から60年以上にわたって続いておりましたが、2015年4月に研究所組織に改編されたというわけです。

文学会は、機関誌『文學論叢』を発行することが主たる活動で、外部から研究者を招聘して講演会を開催することもしておりましたが、どちらかといえば内輪だけの活動に留まっておりました。研究プロジェクトを立ち上げたり、学外の研究者との交流を企図したりすることを可能ならしめる構造にはなっておりませんでした。2011年12月に本学の研究体制・政策検討プロジェクトが答申を出したのを機に、外部に開かれた研究機関としての仕組みを作り上げたということでございます。

発足したばかりですので、開設時に掲げた事業はいまだ展開できてはおりませんが、2年目を迎えるにあたって、他の大学や機関の研究者との共同研究に動きはじめたところです。本日の会は、その2回目にあたるものですが、我が研究所が掲げる基礎研究の推進という観点からすれば事実上初めての研究会になるのではないかと、私は思っております。

現在では、ほとんどの学問分野がそれを目指しているように、愛知大学人文社会学研究所も、物事やこれを支える「言葉」や「知」には自然にできあがったものはひとつもなく、それらが形成されるについては、権力であるとか権威であるとか、必ず何かの力とこれを支える思惑が関わっているという観点にたち、まずはそうした力の在り処を可視化するというのを、ひとつの目標としております。これまでのところは、国民国家であるとかナショナリズムであるとかジェンダーであるとか、そういう分析視角での研究を念頭に置いていたように思えますが、本日は、インフラストラクチュアを変数として、「知」の成り立ちをめぐる問題に切り込まれるようであります。

今日のこの会は、回数からいっても、切り口からいっても、研究所にとりまして非常に新しいものでありますので、その成果におおいに期待をしているところであります。長時間になりますけれども、どうか活発な議論が展開されることを期待しております。どうか、よろしく願いいたします。